

栄養学分野の国際会議の日本での開催について

東京大学 総括プロジェクト機構
第12回アジア栄養学会議 事務局長
第22回国際栄養学会議 準備委員長

加藤 久典



要 旨

栄養学分野の重要な2つの国際会議が日本において開催される。本年5月に横浜で行われる第12回アジア栄養学会議 (Asian Congress of Nutrition, 12th ACN) と、2021年に東京での開催が決まっている第22回国際栄養学会議 (International Congress of Nutrition, 22nd ICN) である。これらが日本で開催されることが決まったのは、関連分野の学会等が国際化に向けて努力を続けてきた成果と、日本に対する世界各国からの期待とが相まってのことである。本稿では、これらの会議の母体であるアジア栄養学会連盟 (Federation of Asian Nutrition Societies, FANS) および国際栄養科学連合 (International Union of Nutritional Sciences, IUNS) について述べ、12th ACNの概要や準備状況と22nd ICN誘致獲得に至った経緯などについて紹介する。これらの会議の成功により、栄養科学や食品科学の世界における日本の存在感がさらに増して行くことが期待される。特に12th ACNは本誌刊行時において数か月後に迫っている。是非多くの方にご参加いただき、積極的な発表や議論、交流の場にしていただければと切に願っている。

<Summary>

Two major international congresses in the area of nutritional science will be held in Japan in the next few years. One is the 12th Asian Congress of Nutrition (12th ACN) which will be held in Yokohama in May 2015. The other is the 22nd International Congress of Nutrition (22nd ICN) in 2021 in Tokyo. One reason international scientific societies have decided to bring these congresses to Japan is the continuous effort of Japanese academic societies toward internationalization. Another reason is the high reputation of Japanese scientists from all over the world. In this article, I will first introduce the international organizations behind these congresses, the Federation of Asian Nutrition Societies (FANS) and the International Union of Nutritional Sciences (IUNS). I will then summarize the events and program for the 12th ACN and its status of preparation. In addition, I would like to show the process of how we won the bid for the 22nd ICN. The success of these congresses will surely enhance Japan's presence in international nutrition and food science. The 12th ACN will be held several months following the publication of this issue. I sincerely hope many readers will participate in the event and make it a chance for active communication not only through presentations but also through discussions and meeting new colleagues from around the world.

International Congresses of Nutritional Science
to Be Held in Japan

HISANORI KATO, Ph.D.
Organization for Interdisciplinary Research Projects,
The University of Tokyo
Secretary General, 12th Asian Congress of Nutrition
Chair of Preparative Committee,
22nd International Congress of Nutrition

1. はじめに

本年（2015年）5月14日～18日にパシフィコ横浜で開催される第12回アジア栄養学会議（Asian Congress of Nutrition, 12th ACN）、6年後（2021年）に開催が予定される第22回国際栄養学会議（International Congress of Nutrition, 22nd ICN）と、栄養科学・食糧科学分野の重要な会議が我が国で行われることとなった。本稿ではまず、これらの会議の母体となっている国際団体について紹介し、12th ACNの日本開催に至った経緯と会議の準備状況や概要を述べる。さらに22nd ICN誘致活動の概要について報告したい。

2. 栄養科学分野の国際組織と日本の寄与について

関連組織のうち、これらの会議に直接関係のある2団体について紹介する

(1) アジア栄養学会連盟 (Federation of Asian Nutrition Societies, FANS)

1973年の第2回ACNの際に設立された。その目的は、(a)アジア地域の栄養科学者の交流を深め、研究、教育、活動における協力を推進すること、(b)ACNの定期的な開催等を通じ、栄養科学分野の研究の情報や経験の交換を促進すること、(c)メンバー国と国際栄養科学連合 (International Union of Nutritional Sciences, IUNS) や国連機関との間の仲介をすること、となっている。

現在18の国や地域の関連学会が加盟しており、1か国がオブザーバーとなっている^(脚注1)。参加学会の会員総数は40,000人を超える。現在の事務局はシンガポールにあり、会長はMs. Pek-Yee Chow (シンガポール) である。

FANSの活動は、4年に一度のACNの開催、ビジネスミーティングとして2年に一度の総会の開催、2年に一度の“FANS News Letter”の発行により加盟団体の活動を紹介することなどがある。我が国は日本栄養・食糧学会が加盟している。東北大学大学院の宮澤陽夫先生がFANSの理事 (Council member) を2007年から務

められている。2014年10月にご逝去された金森正雄先生 (京都府立大学名誉教授) は、FANSに長く貢献され名誉理事を務めて来られた。

FANSの細則により、ACNを開催した国がその後の4年間の運営を担当することとなっている。これに関しても読者の皆様のご指導とご協力をお願いしたい。

FANSウェブサイト (2011-2015) : <http://www.fans-asia.org/>

(2) 国際栄養科学連合 (International Union of Nutritional Sciences, IUNS)

1948年に設立され、その使命は、(a)地球レベルでの協力を通じ、栄養の科学、研究、開発の進展に寄与すること、(b)栄養科学研究者の間での交流と協力を促すとともに栄養科学の情報を発信すること、となっている。80以上の国や地域が所属しており、80以上の会員国と15の関連団体 (FANSを含む) で構成される。事務局はロンドンにあり、現在の会長はDr. Anna Lartey (ガーナ大学) である。IUNSは、国際科学連合 (ICSU) の参加組織となっている。

4年に一度のICNの開催のほか、各種Task Forceを通じて世界の栄養学やその実践に対して大きな影響を及ぼしている。我が国は日本学術会議が会員団体となっており、分担金を拠出している。日本学術会議内でのIUNSへの対応は、IUNS分科会 (委員長は東京農業大学の清水誠先生) が担ってきた。過去に島菌順雄先生がIUNSの副会長を務められ、大磯敏雄先生、田中武彦先生、小林修平先生が理事を務められている。また宮澤陽夫先生は、一昨年 (2013年) 9月のIUNS総会で理事に選出されている。

なお、2003年頃までのIUNSの状況や活動の詳細については、安本教傳先生が当時の日本学術会議栄養・食糧科学研究連絡委員会委員長のお立場で日本栄養・食糧学会のウェブサイトに寄稿下さっている。ご参照いただきたい。 (<http://www.jsnfs.or.jp/wp-content/uploads/file/link/iuns.html>)。また、日本栄養・食糧学会と国際団体との関係の歴史については、同学会編集の書籍 (『食を楽しむ健やかに生きるために』、光生館、1997) に詳しい。IUNSウェブサイト : <http://www.iuns.org/>

脚注1 : FANS加盟国 (2014年11月現在) バングラデシュ、中国、インド、インドネシア、イラン、日本、韓国、レバノン、マレーシア、パキスタン、フィリピン、シンガポール、スリランカ、台湾、タイ、ベトナム、香港、モンゴル、(オブザーバー国 : オーストラリア)

3. 第12回アジア栄養学会議 (12th ACN)

(1) 開催決定の経緯と開催準備

表1にこれまでのACNの開催地を示している。日本では1987年に第5回ACNが開催された(会長:井上五郎先生、事務局長:田中武彦先生)。2007年9月の10th ACN(台北)の期間中、FANS総会の席において当時の日本栄養・食糧学会会長の本間清一先生が、12th ACNの日本での開催の打診を受けた。本間先生はここでは権利を留保することにされ、その後我が国の約10の学会に声をかけて意見交換をしたり、日本栄養・食糧学会の理事会や総会の承認を受けるなどの過程を経て開催国に立候補することとなった。その後、この活動は矢ヶ崎一三会長に引き継がれ、理事会のもとに誘致委員会(宮澤委員長)が組織された。まず開催概要を決定しFANS事務局へBid Paper(立候補提案書類)を提出、さらに他国への支持の要請などの準備を行い、2009年にバンコクで開催された19th ICN期間中のFANS総会で日本での開催が決まった。日本以外に3か国が立候補していたが、宮澤委員長によるプレゼンテーション後に行われた投票では、1回の投票で決することができた。12th ACNの誘致活動は、日本政府観光局(JNTO)より、優れたものとの評価を受けて平成22年度「国際会議誘

致・開催貢献賞」を授与されている。

開催決定後、速やかに、日本栄養・食糧学会内に宮澤先生を委員長とする12th ACN組織委員会が立ち上げられ、その後の準備が行われてきた。12th ACNは第69回の日本栄養・食糧学会大会と合同開催とすることが決定された。運営にあたるPCO(Professional Congress Organizer)の選定も行われた。組織委員会内に各委員会が置かれた。現在の委員会(委員長、敬称略)は、総務委員会(矢ヶ崎一三)、財務委員会(清水誠)、募金委員会(石田均)、プログラム委員会(伏木亨)、展示委員会(近藤和雄)、広報委員会(熊谷日登美)、会場委員会(下村吉治)、行事接遇委員会(柳田晃良)、宿泊旅行委員会(門脇基二)、授賞選考委員会(関泰一郎)、事務局(加藤久典)からなり、各委員会ベースでその後の準備が進められてきた。特に総務委員会はこれまでに17回開催されている。広報活動としては、ポスターや配布物の作成と配布、11th ACN(シンガポール)や20th ICNにおけるブースでの広報などが行われてきた。講演等のプログラムがプログラム委員会により決定され、募金委員会や展示委員会により既に多くのスポンサー等の目途が立ってきている。

国内の著名な先生方に顧問にご就任いただき、さらにInternational Advisory Boardのメンバーとして国際的に名高い先生方に就任いただいて、ご指導とご助言を仰いできた。日本学術会議へ共同主催の申請を行い、共同主催国際会議として採択された。さらに、厚生労働省、内閣府食品安全委員会、農林水産省、文部科学省、神奈川県、横浜市、21の関連学協会^(脚注2)に後援をいただいている。

(2) 会議の概要

会期は2015年5月14日(木)~5月18日(月)、会場はパシフィコ横浜となっている。テーマは、“Nutrition and Food for Longevity: For the Well-Being of All”である。プログラムの概要を図1に示してある。第69回国内大会(会頭は東京農業大学鈴木和春先生)と合同であるが、一般演題は全て英語となる。ポスター発表が主であるが、一部、口頭発表が予定されている。

表1 過去と今後のACN開催地
Table 1 Venues of past and future ACNs

開催年(回)	開催国(都市)
1971年(第1回)	インド(ハイデラバード)
1973年(第2回)	フィリピン(マニラ)
1980年(第3回)	インドネシア(ジャカルタ)
1983年(第4回)	タイ(バンコク)
1987年(第5回)	日本(大阪)
1991年(第6回)	マレーシア(クアラルンプール)
1995年(第7回)	中国(北京)
1999年(第8回)	韓国(ソウル)
2003年(第9回)	インド(ニューデリー)
2007年(第10回)	台湾(台北)
2011年(第11回)	シンガポール
2015年(第12回)	日本(横浜)
2019年(第13回)	インドネシア(バリ島)

脚注2: 12th ACN 後援学協会(アイウエオ順) 神奈川県栄養士会、日本アミノ酸学会、日本栄養改善学会、日本栄養士会、日本機能性食品医学学会、日本外科代謝栄養学会、日本食品衛生学会、日本食品科学工学会、日本糖尿病学会、日本糖尿病協会、日本動脈硬化学会、日本内分泌学会、日本農芸化学会、日本ビタミン学会、日本肥満学会、日本病態栄養学会、日本フードファクター学会、日本ポリフェノール学会、日本油化学会、日本臨床栄養学会、日本臨床栄養協会

	5月14日(木)	5月15日(金)	5月16日(土)	5月17日(日)	5月18日(月)
午前	日本栄養・食糧学会総会	朝食 プレナリー講演/特別講演 教育講演 シンポジウム ワークショップ 口頭発表	朝食 プレナリー講演/特別講演 教育講演 シンポジウム ワークショップ 口頭発表	朝食 プレナリー講演/特別講演 教育講演 シンポジウム ワークショップ 口頭発表	
午後	開会式 特別講演	ポスター発表&コーヒーブレイク ランチョンセミナー シンポジウム ワークショップ 口頭発表 ポスター発表&コーヒーブレイク シンポジウム ワークショップ 口頭発表 FANS総会	ポスター発表&コーヒーブレイク ランチョンセミナー シンポジウム ワークショップ 口頭発表 ポスター発表&コーヒーブレイク シンポジウム ワークショップ 口頭発表	ポスター発表&コーヒーブレイク ランチョンセミナー シンポジウム ワークショップ 口頭発表 閉会式	企業展示 教育ツアー
夕方	ウェルカムパーティ	関連学協会 イブニングセミナー	コングレスディナー		

図1 12th ACN の概要
Figure 1 Overall program of the 12th ACN

初日に日本栄養・食糧学会の総会があり、その後ACNの開会式が行われる。2題の基調講演のあとにウェルカムパーティーが行われる。15日から17日まで基調講演、教育講演、シンポジウム、ポスター発表、口頭発表、ランチョンセミナー、イブニングセミナー、企業展示が行われ、16日にコングレスディナー、18日には教育ツアーが組まれている。教育ツアーは、学校給食、高齢者福祉施設、食品工場の3種のコースを設定した。また、市民公開講座が16日午後に予定されている。

基調講演は、阿部啓子先生（東京大学名誉教授）、安本健先生（東北大学名誉教授）、Dr. Jeffery Friedman (Rockefeller University)、Dr. Carlos A. Monteiro (University of São Paulo)、Dr. Kraisid Tontisirin (Mahidol University) の5名の先生にお願いしている。本稿脱稿時（2014年11月15日）までに、13の教育講演、44のシンポジウム（スポンサードシンポジウムを含む）、17のランチョンセミナー、3つのイブニングセミナーが計画されている。ILSI JapanもMicronutrient Fortification Programというタイトルでスポンサードシンポジウムを開催する。プログラムの中でユニークなものとして、FANSメンバーの各国や地域からのCountry/Regional Report、17日に展示会場で行われる日本料理アカデミーの共催によるだしのシンポジウムなどがある。プログラムの詳細については、下記の12th ACNウェブサイトをご覧ください。なお、シンポ

ジウムのプロシーディングスを、*Journal of Nutritional Science and Vitaminology* (JNSV、日本栄養・食糧学会と日本ビタミン学会の共同編集)のSupplement号として発行する。これはプログラム委員会の中のプロシーディングス小委員会が進めており、会議の際に頒布できるよう松井徹委員長を中心に準備中である（追記：2014年11月30日に一般発表演題の受付を終了したが、約1,800題もの演題登録があった）。

会議の運営にはボランティアの力を借りる予定になっている。現在ボランティアの募集を日本栄養・食糧学会のウェブサイトで行っている。

海外、特に低所得国からの将来有望な若手の参加を促すために、Travel Awardを設けている。公益財団法人浦上食品・食文化振興財団より、この目的の資金をご提供いただけるというお申し出をいただき、20名の若手にUrakami Foundation Travel Awardを授与できる運びになっている。これに加えて、ACNからも何名かにTravel Awardを用意する予定である。さらに、国内外のやはり若手を奨励する目的で、優れた内容の発表にYoung Investigator Awardを授与する。

- 12th ACN ウェブサイト：<http://acn2015.org/>
- 公益社団法人日本栄養・食糧学会ウェブサイト：<http://www.jsnfs.or.jp/>
- 第69回日本栄養・食糧学会大会ウェブサイト：<http://nodaiweb.university.jp/69th-eishoku/>

4. 第22回国際栄養学会議 (22nd ICN)

表2にこれまでのICNの開催地を示している。日本では1975年に第10回ICNが京都国際会議場で開催された(大会会長:越智勇一日本学術会議会長、組織委員長:満田久輝先生、事務局長:金森正雄先生)。次回(第21回、2017年)は、ブエノスアイレス(アルゼンチン)で行われることが決まっている。

近い将来もう一度我が国でICNを開催したいという話は、IUNS分科会などで話題には上がっていたが、具体的にいつ頃立候補するかといった議論にはなっていない。2012年の8月にIUNS本部より連絡があり、2021年の開催に立候補する場合はbid書類を提出せよとのことであった。提出締め切りまでちょうど1か月しかなかったが、学術会議IUNS分科会委員長として清水誠先生が関係の学会等と相談し、急遽立候補することとなった。IUNS分科会、日本栄養改善学会、日本栄養・食糧学会の3者による誘致活動を行うこととしたが、作業は日本栄養・食糧学会を中心に進めるということになった。当時の同学会の国際交流委員長であった筆者が座長となり、10名のメンバーからなる誘致準備WGが立ち上がった。

日本政府観光局(JNTO)と相談し、開催施設を東京国際フォーラムに決定するなど基礎案をまとめた。東京

都知事や観光庁長官などからの招請レター、他国からの支持レターなどを取得し、東京観光財団(TCVB)の協力を得て、約25ページからなるIUNS提出用のbid書類を完成させ、9月に提出を完了した。

ICNの開催誘致はこのところ毎回熾烈であり、繰り返し立候補している国も多いので、今回日本が選ばれる可能性は低いと思われたが、将来に向けて取りあえず出しておこうという雰囲気があった。そうしていたら、2013年3月になってIUNSから連絡があり、7か国の中から最終候補3か国に選ばれたとのことであった。同年9月のグラナダ(スペイン)の20th ICN中の総会で投票があって開催地が決まるとのことだった。競合相手は中国(北京)とアイルランド(ダブリン)であるという情報も得られた。

俄然本気を出す必要に迫られることとなり、以下を行っていった。東京都の国際会議誘致助成金の獲得、東京都の国際会議開催助成金および開催支援プログラムへの申請、日本栄養・食糧学会内での活動資金確保、大会テーマとロゴの決定、情報収集と戦略の決定、キーパーソンの日本への招聘、誘致のためのPCOの選定、内閣総理大臣・厚生労働大臣からの支持レター獲得、各国への再度の支持要請、プロモーションビデオの作成、最終bid書類の作成(写真1、40ページを超えるものとなった)、誘致活動ウェブサイトおよびFacebookサイトの開設、グラナダでの配布物の作成(写真1)、グラナダでのJapan Nightの準備、展示ブースの準備、プレゼンテーション素材の作成、日本からのICN参加者

表2 過去と今後のICN開催地
Table 2 Venues of past and future ICNs

開催年	開催地
1946年(第1回)	イギリス(ロンドン)
1952年(第2回)	スイス(バーゼル)
1954年(第3回)	オランダ(アムステルダム)
(途中省略)	
1972年(第9回)	メキシコ(メキシコシティ)
1975年(第10回)	日本(京都)
1978年(第11回)	ブラジル(リオデジャネイロ)
1981年(第12回)	アメリカ(サンディエゴ)
1985年(第13回)	イギリス(ブライトン)
1989年(第14回)	韓国(ソウル)
1993年(第15回)	オーストラリア(アデレード)
1997年(第16回)	カナダ(モントリオール)
2001年(第17回)	オーストリア(ウィーン)
2005年(第18回)	南アフリカ(ダーバン)
2009年(第19回)	タイ(バンコク)
2013年(第20回)	スペイン(グラナダ)
2017年(第21回)	アルゼンチン(ブエノスアイレス)
2021年(第22回)	日本(東京)



写真1 ICN誘致活動の制作物(Bid Paper、パンフレット、うちわ、バッジ)
Photo 1 Giveaways for the bidding activity of ICN (Bid paper, Brochure, Paper fan, Badge)



写真2 ICN 誘致活動のブース
Photo 2 A photo of our promotion booth

への協力呼びかけ、などである。

グラナダでは9月16日の第1回IUNS総会でプレゼンテーションを行い、18日の第2回総会で投票が行われるとのことであった。展示ブース(写真2)を設営し、日本からの参加者の自主的な協力も得て、日本支持への呼びかけを行った。15分間のプレゼンテーションは、筆者とTCVBの職員とで行った。Japan Nightを開催し、投票権者に直接メールを送るなど、ロビー活動を進めた。いよいよ投票が行われたが、1回目の投票で過半数を獲得(53票中32票)し、我が国での開催が決定した。この誘致活動も、平成26年度のJNTO「国際会議誘致・開催貢献賞」を授与されるに至った。

実はグラナダ入りしてからも、日本は圧倒的に不利であると言われていた。ある意味、大逆転を成し遂げることができたのだが、誘致活動の詳細については、かなりの思い入れを込めたものを別にかかせていただいたので、ご一読願えれば幸いである。(「2021年国際栄養学会議誘致の報告」日本栄養・食糧学会誌、66、315-320(2013)、または以下からもご覧いただける。http://www.jsnfs.or.jp/news/news_20130927.html)

誘致の成功を受けて、IUNS分科会や日本栄養・食糧学会で検討し、22nd ICN準備委員会が作られた。本格的な準備は今年のACNの後となる。

ICN 2021 Tokyo ウェブサイト：<http://icn2021.org/>

ICN 2021 Tokyo Facebook サイト(国内向け)：

<https://www.facebook.com/ICN2021>

5. おわりに

関係分野の国際会議として、2008年に国際栄養士会議(ICD)がパシフィコ横浜で開催され、大成功を収めたことは、ACN、ICNにも励みのもととなっており、参考になるところも多い。今回のACNは過去のどのACNと比較しても圧倒的に充実したプログラムとなっている。読者の皆様においては、最先端の研究にどっぷり浸かり、世界中の研究者と交流を深める機会を逃さぬよう、是非、横浜の地へ足をお運びいただきたい。なお、事前参加登録の締め切りは、2015年4月30日となっている。また、多くの関連企業にスポンサーや展示の申込みをいただいていることに、この場を借りて深く御礼申し上げたい。まだ申込みをされていない企業等におかれは、是非ご検討願えと幸いである。

22nd ICNのテーマは、“The Power of Nutrition: For the Smiles of 10 Billion People”とした。世界の栄養学の頂点の会議が日本で開催されることで学術上のみならず、産業面での大きなインパクトも期待される。この成功についても、たくさんの企業各位のご協力を仰がなければ不可能である。東京オリンピックの翌年の開催となるが、オリンピックのみならずその先のICNにも注目していただくよう切にお願いして本稿を終えたい。

略歴

加藤 久典(かとう ひさのり) 農学博士

1984年 東京大学農学部農芸化学科 卒業

1988年 東京大学大学院農学系研究科農芸化学専攻博士課程 中退
同 東京大学農学部 助手

1990年 農学博士(東京大学)

1991年 アメリカ合衆国NIH糖尿病部門 客員研究員

1993年 宇都宮大学農学部生物生産科学科 助教授

1999年 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻
助教授

2009年 東京大学総括プロジェクト機構 特任教授

現在に至る